

## 教室研究の展望と課題：教室における第二言語習得過程の解明に向けて

新井 眞美

### 要 旨

近年、日本語教育に関する研究の中でも、教室研究 (classroom research) が行われるようになってきた。こうした日本語教育における教室研究は、主に教師の自己研修といった、教師養成・研修との関連で展開しているところに特徴がある。欧米で先行している、主に英語教育における教室研究の目的を、大きく教師訓練 (teacher training) と基礎研究 (fundamental research) の二つに分けるとすると、日本語教育における教室研究は、現在、前者に対し、後者を目的とした教室研究が出遅れた状態にあると言える。

本稿では、後者の基礎研究を目的とした教室研究として、クラスルーム・プロセス・リサーチを取り上げ、これが教室における第二言語習得過程の解明に向けた研究の中でどう位置づけられるかを示し、日本語教育の中で、今後その教室研究を進めて行く上での課題を検討する。

〔キーワード〕 教室研究、クラスルーム・プロセス・リサーチ、第二言語習得、日本語教育

### 1. はじめに

石井・谷口(1993)は、日本語教育に関する研究には3つの潮流、即ち①日本語そのものの言語学的研究、②日本語の教え方についての研究、③日本語の学習についての研究があり、これは時期的にみると①から③の順序で盛んに行われるようになってきたと分析している。その中で、教室研究 (classroom research) に関しては、「1990年を過ぎてから授業分析、授業の自己観察を扱った論文が増えて来る。」(p. 21)としている。そして、実際に出された研究論文について、「これらの研究は、自分の授業の実態を教師自身が知ろうという試みであり、それによって教師の自己研修、自己改善を目指したものである。」(p. 25)と述べている。

このように、近年盛んになってきた日本語教育における教室研究は、教師の自己研修といった、教師養成・研修との関連で展開しているところに特徴があ

る。また、これらの研究には、分析方法として英語をはじめとする第二言語教室研究（以下L2CRとする）の分野で1970年代から80年代にかけて考案されたFOCUS等の分析システムがよく用いられていることから、欧米におけるL2CRを参考にしていることがわかる。従って、日本語教育における教室研究の現状をとらえ、今後の課題を検討するにあたり、欧米におけるL2CRの発展過程を知ることは有効であると思われる。

そこで、本稿では、まず欧米におけるL2CRがどのように発展してきたか、それが方法論にどのような変化をもたらしてきたかを概観する。そして次に、教室における言語習得過程の解明に向けた教室研究を取り上げ、日本語教育の中で今後同様の研究を進めて行く上での課題を検討する。

## 2. 欧米におけるL2CRの発展——焦点の移行：教授法の効果の測定からプロセスの観察へ

欧米においてL2CRが目ざましい発展を遂げてきたのは、1970年以降、ここ20年のことである（Ellis, 1990:10）。それ以前、1960年代に行われた教室研究は、優れた教授法(method)を特定することを目指したもので、異なる教授法間で、学習に与える効果を測定し、それを比較することにより優れた教授法を明らかにしようとした。

例えば、オーディオ・リンガル法と文法訳読法とではどちらが優れたものであるかを測るため、それぞれの教授法を用いた言語教育を、ある一定の期間、異なったグループで実施し、実施前のテスト（ル・テスト）と、実施後のテスト（ポスト・テスト）の結果を比較した。この方法の特徴は、product-based、つまり学習効果の測定に絶対的な信頼をおいたもので、教室でおこる教授と学習のプロセスには関心が向けられなかった（Ellis, 1994:565）。

このようなL2CRが行われた背景には、当時、「教室で起こっていること、そしてその結果学習されることは、どの教授法を選択するかによって完全に決定されると考えられていた。」ことがあり、従って「重要なことは適切な教授法を見つけ出すことであった。」（Allwright & Bailey, 1992:7）のである。

しかし、結果からは、期待されたような違いは導き出されず、それぞれの教授法で強調されているもの、例えば文法訳読法では読解と翻訳、オーディオ・リンガル法では聴解と会話を、そのまま反映した結果になった。こうして、優れた教授法を特定するという試みは失敗に終わり、唯一絶対的に優れた教授法

はないとの認識がなされた。これにより、何がよい教授法であるかを決め、それに従って教師訓練を行おうという単純な見通しは打ち砕かれたのである。

この失敗を受け、1970年代以降には研究の焦点が「教授法の効果」から、実際に教室で起こっている「プロセス」そのものへと移行し、これを記述する方法の模索が始まった。この移行は、L2CRの目的が、最善の教授法や教授技術を決定するといった教育的なことから、基礎研究 (fundamental research) <sup>(1)</sup> へと移行したことを示すものである。

### 3. 教室研究の方法

#### 3. 1 方法論における4つの潮流

L2CRは、発展過程において教育学、社会学、心理学、言語学、応用言語学等の影響を受け、これらの研究の成果を部分的に吸収してきたため、方法論が非常に多岐にわたっている。Chaudron(1988)は、こうした多岐にわたる方法論を歴史的に概観し、以下の4つの潮流にまとめている。

表 3.1 Chaudron(1988)におけるL2CR方法論の潮流

- |                                    |  |
|------------------------------------|--|
| ①心理測定的方法<br>(psychometric)         | : 実験的方法。実験群と統制群のル・テストとポスト・テストをはかる。       |
| ②相互作用分析法<br>(interaction analysis) | : 様々な授業観察システムを用いて相互作用をコード化し、その発生頻度を測定する。 |
| ③談話分析法<br>(discourse analysis)     | : 教室での談話を文字化し、談話分析上のカテゴリに分類して分布状況を調べる。   |
| ④民族誌的方法<br>(ethnographic)          | : コントロールされていない自然な観察と記述。                  |

Nunan(1989:5)より

①の心理測定的方法 (psychometric) は、2. で触れた、教授法の効果を測ることを目指したL2CRに用いられたものである。そして、研究の焦点が、教授法からプロセスへ移行したのに伴い、方法論も「測定」重視から、「観察」重視へと移行した。

ここでまず用いられた方法論が、②相互作用分析法 (interaction analysis) であり、これは日本語教育における研究でも採用されている。そこで以下では、②相互作用分析法で使用する観察スケジュール (observation schedule) <sup>(2)</sup> の中から、日本語教育における教室研究に採用例のある F l i n t <sup>(3)</sup>、FOCUS <sup>(4)</sup>、COLT <sup>(5)</sup> を具体例としてあげ、相互作用分析法の特徴と方法論としての有効性を検討する。

### 3. 2 相互作用分析法 (interaction analysis)

L2CRには、一般教科の教室研究の後を追う形で発展してきたという側面があり、L2CRにおける測定重視から観察重視への移行に伴う方法論の変化は、一般教科での教室研究の方法論の修正という形で起こった。

もともと教師訓練の分野で始まった一般教科の教室研究では、道具 (instrument) として、授業観察のための観察スケジュールが用いられていた。そして、予め決められたリストである観察スケジュールにどれだけ合致するかで教授行動の評価が行われた。

この観察スケジュールにおけるパイオニア的存在がFlanders(1970)の作成したF I A C ('Flanders' Interaction Analysis Categories) という観察スケジュールである。F I A Cは、一般教科の教室を対象に作られたものであるが、Moskowitz(1971) はこれを特に第二言語教室用に修正し、F L i n t (Foreign Language interaction) を作成した。次に示す項目は、F L i n tにおけるカテゴリーである。

#### 教師の発話

##### 間接的影響

1. 感情への対処 (学習者のさまざまな感情に受容的に対処する)
2. 称賛・激励
- 2a. 冗談
3. 学生のアイデア使用 (学生の考えを明確にしたり、要約したり取り入れる)
- 3a. 学生の応答の繰り返し
4. 質問

##### 直接的影響

5. 情報を与える (説明、講義など)
- 5a. 拒絶せずに訂正する
6. 指示を与える
- 6a. パターン・ドリルの指示
7. 学生の行動を批判する
- 7a. 学生の反応を批判する

### 学生の発話

- 8. 学生の応答 (制限された応答)
- 8a. 学生の応答 (コーラス)
- 9. 学生の応答 (学生自身の考え、意見、感情等に基づき自発的な応答)

### その他

- 10. 沈黙
- 10a. 沈黙 (視聴覚教材—テープ、フィルムなど—使用による)
- 11. 混乱 (作業によるもの)
- 11a. 混乱 (作業によらないもの)
- 12. 笑い
  - e. 母語使用
  - n. 非言語

Chaudron(1988:32-33)参照

FLintは、実習生にこれを用いて自らの教授行動を分析させることにより、実習生へのより客観的なフィードバックを可能にするという方法で、教師訓練に用いられた。

Fanselow(1977)のFOCUS(Foci for Observating Communications Used in Settings)も、教師訓練を意図して作られたものであるが、FLintとは異なり、教師用、学習者用のカテゴリーの区別がないことから、教室以外のインターアクションの記述にも対応できるという特徴がある。

また、教授法に関わる理論から影響を受けたものとして、Allen, Frohlich, and Spada(1984)の作成したCOLT(Communicative Orientation of Language Teaching)がある。これはコミュニケーションな言語教授と、そうではない教師主導、形式重視の教授とを区別する意図で用いられ、どの程度指導がコミュニケーションなものであるかを測るためのカテゴリーがデザインされている。<sup>6)</sup>

### 3.2 観察スケジュールの比較

	カテゴリーの数	目的
Moskowitz(1970)	10	教師訓練
(1976)	34	教師訓練／基礎研究
Fanselow(1977)	73	教師訓練／基礎研究
Allen et al. (1978)	83	基礎研究

Chaudron(1988:18-19)参照

相互作用分析法に用いられる観察スケジュールは、表3. 2のカテゴリー数に見られるように、初期においては比較的単純なものであったが、次第に細分化し、洗練されていった。それに伴い、もともと教師訓練の目的で用いられはじめた観察スケジュールが、基礎研究の目的でも使用されるようになった。

この教師訓練、基礎研究という二つの目的に関し、Allwright & Bailey(1992)は、「基礎研究と教師養成との間に緊密なつながりを保とうとすることには、そもそも問題がある。」(p. 11)と述べ、基礎研究を目的とした教室研究、教師養成を目的とした教室研究それぞれに必要な道具について、「基礎研究に必要なものは、十分に発達した、信頼性のある観察の道具であり、分析システムでなければならない。これに対し、教員養成に必要な道具は、それほど完成されたものではなくてもよく、文字化したり、録音したデータを分析したりするのに時間をかけずに、迅速に経験のない教師に教えられ、彼ら自身が自分の教授過程の分析に使用できるものである必要がある。」(p. 11)と述べている。つまり、基礎研究を目的とした場合には、道具そのものの信頼性、妥当性が問われ、これらの追究が求められるのに対し、教師訓練の場合には、教師の目を教授過程に向けさせることに意義があるため、道具の信頼性、妥当性よりも、実用性(単純化されていること、処理に時間がかからないこと等)が求められるといった違いがある。従って、両者を同次元で考えるのには無理があるということである。<sup>(7)</sup>

以上の議論は、相互作用分析法が現在、教師訓練の目的では有効とされているものの、基礎研究目的では使用されなくなってきた理由を提示している。相互作用分析法が基礎研究目的の道具として適当でないとされる一つの大きな理由は、カテゴリーに信頼性と妥当性の点で疑問がもたれるためである。つまり、カテゴリーが、カテゴリーを作った者の主観を反映したものであるため、信頼性と妥当性に欠け、教室でおこっているプロセスを描きだすには限界があると認識されたためである。この結果、基礎研究目的で用いられる方法論は、③談話分析法、④民族誌的方法といった、より詳細な記述に基づく方法へと変化していった。

以上、相互作用分析法を中心に行った方法論の検討は、今後日本語教育において、特に基礎研究を目的としたL2CRを進めていく上での方法論の選択に対し、示唆を与えるものと思われる。

#### 4. L2CRと言語習得

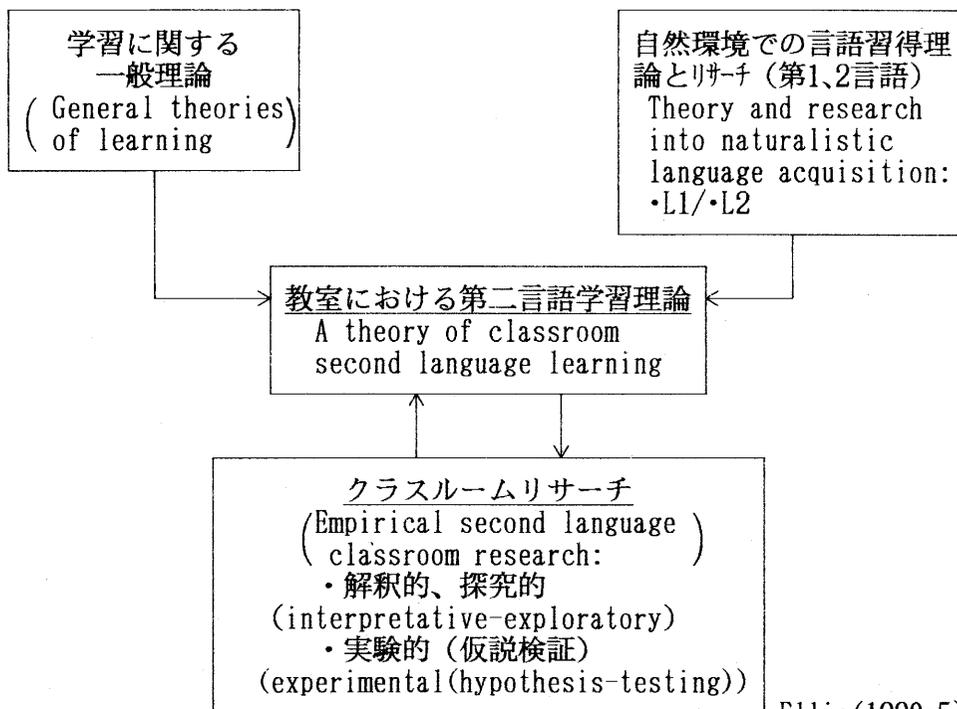
L2CRの焦点がプロセスへ移行した後、社会言語学、言語心理学、教育学等、様々な学問分野との関連で基礎研究目的のL2CRが進められるようになった。その中で、1970年代の終わりごろから、L2CRは、第二言語習得研究の影響を大きく受けようになり、第二言語習得理論との関連でもL2CRが行われるようになった。ここでの関心事は、教室でどのように言語習得がなされるかという、教室における第二言語習得 (classroom second language acquisition) の解明である。

以下、教室における第二言語習得の解明に向けたL2CRの全体像の中で、プロセスに焦点をあてた基礎研究というものがどのような役割を果たすかをみることにする。

##### 4. 1 教室における第二言語習得 (classroom second language acquisition)

Ellis(1990)は、教室における第二言語習得理論の構築を主張し、これに向けた三つのアプローチの中の一つとして、図4.1のようにL2CRを位置づけている。

図4.1 教室における第二言語学習理論を発達させる3つのアプローチ



Ellis(1990:5)より

教室における言語習得の解明をめざしたL2CRには、教室という場をどうとらえるかにより、二つの観点が考えられ、それに従い研究の対象も大きく二つに分けて考えられる (Ellis, 1990, 1994)。二つの研究の対象、観点は以下の通りである。

#### 4. 1. 1 教室でのインターアクションと第二言語習得

第一の観点は、教室を、「学習者に第二言語習得の機会を与えるような様々なインターアクションが起こっている場」 (Ellis, 1994:565) ととらえる。この観点に基づいたL2CRでは、どのように学習の機会が作られるかを理解するために、教室で起こっているインターアクションの観察と、記述を行う。このように、どのように教授と学習が起こるかについての理解を深めるため、教室で起こるインターアクションを詳細に記述する性質のL2CRを、Gaies(1983)は特にクラスルーム・プロセス・リサーチと呼んでいる (Ellis, 1994のまとめによる)。

クラスルーム・プロセス・リサーチは、次の段階として、どのようなタイプのインターアクションが、どのような言語習得に結びつくかを解明する方向に発展しうるが、こうした、教室でのインターアクションと言語習得との関係を直接に扱った研究は今のところほとんどない状況にある (Ellis, 1994参照)。

#### 4. 1. 2 フォーマル・インストラクション (formal instruction) と第二言語習得

第二の観点は、教室を、「第二言語習得の過程に直接介入をする場」 (Ellis, 1994:565) ととらえる。この観点に基づいたL2CRでは、フォーマル・インストラクションが言語習得に与える効果に関心が向けられる。この場合のフォーマル・インストラクションというのは、「第二言語のある特徴を教えることにより、第二言語習得の過程に直接介入しようとする試み」(Ellis, 1994:565) である。

#### 4. 2 基礎研究としてのクラスルーム・プロセス・リサーチ

クラスルーム・プロセス・リサーチは、その性質上、まさにプロセスに焦点をあてていること、また、第二言語習得論との関連の中に体系づけられていることから、基礎研究目的の教室研究の一例を示すものと考えられる。

これまでクラスルーム・プロセス・リサーチが扱ってきたトピックには次のようなものがある (Ellis, 1990)。

1. Error treatment : 教師は学習者の誤用をどのように扱うか
2. Teacher talk : 教師の学習者に対する話し方の形式的、機能的性質
3. 学習者言語 (Learners' language) : 学習者が教室で用いるコミュニケーション・ストラテジーやコード切替え (code-switching)
4. 教室談話 (pedagogic discourse) と自然談話 (natural discourse) の違い
5. 教室談話のタイプ

## 5. 日本語教育における教室研究の今後の課題

本稿では、欧米における L2 CR の発展過程を概観し、それとの対照の中で日本語教育における教室研究の現状をとらえ、今後の課題を抽出することを試みた。その結果、日本語教育における教室研究は、既に教員養成・研修の分野では積極的に行われ始めているものの、もう一方の基礎研究のための教室研究が出遅れた状態にあることが浮き彫りにされる。

そして、現在の教室研究の大きなテーマの一つである、教室における第二言語習得過程の解明に向けた教室研究として、日本語の教室で実際に起こっているプロセスを明らかにするクラスルーム・プロセス・リサーチという基礎研究が必要であること、その際、談話分析、あるいは民族誌的方法といった、詳細な記述に基づく方法論からのアプローチが必要であるという方向づけ、課題が抽出された。

しばしば経験に基づく実践は、理論に先行すると言われる。実践能力があると考えられる教師の教授行動、教室でのインターアクションを、学習者の言語習得という観点から分析することは、経験的に身に着けた教授能力を理論化しえるものである。これを可能にするためにも、今後、日本語教室でのプロセスを、さまざまな角度から記述する試みがなされることが期待される。こうして実践と理論を結びつける意味においても、クラスルーム・プロセス・リサーチは極めて重要な研究領域であると言える。

## 注

- (1) 基礎研究 (fundamental research) について、Allwright & Bailey(1992) は、「言語教育に価値をもたらすようなもの (例えば教室でのインターアクションのプロセス) で、他の教育研究や第二言語習得の言語心理学の分野に関連するようなもの。」 (p. 14) と説明している。
- (2) 効果的な指導にもっとも結びつくと考えられる教師と学習者の行動のカテゴリーのリスト (Allwright & Bailey, 1992 : 6)。
- (3) 日本語教育における教室研究で、Flintを用いたものには、縫部(1991)がある。
- (4) 日本語教育における教室研究で、FOCUSを用いたものには、文野(1991)、元永(上田)(1992)がある。
- (5) 日本語教育における教室研究で、COLTを用いたものには、細田・岡崎・中條(1988)、猪崎(1993)がある。
- (6) FOCUS、COLTのカテゴリーについては、Allwright & Baileyを参照。
- (7) ただし、長期的に見れば、基礎研究の成果は道具の信頼性、妥当性を高め、教師訓練の質の向上に貢献するものと考えられる。

## 参考文献

- (1) 石井恵理子・谷口すみ子(1993)「教室研究と教師の成長」『日本語学』3月号 pp. 21-30 明治書院
- (2) 猪崎保子(1993)「教室内活動とインターアクション」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』19 pp. 61-76 東京外国語大学
- (3) 岡崎敏雄(1992)「日本語教育学・研究方法論—量的研究の可能性と課題: psychometric approachの場合—」『文芸言語研究 言語篇』22 pp. 25-41 筑波大学文芸・言語学系
- (4) 金田智子(1989)「日本語教育における学習者と教師の相互交渉について」『日本語教育論集』6 pp. 39-75 国立国語研究所日本語教育センター
- (5) 小池生夫監修、SLA研究会編(1994)『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店
- (6) 西口光一(1991)「授業研究の方法と第二言語習得理論」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』14 pp. 1-14
- (7) 日本語教育学会(1992)『教授活動における日本語教師の実践的能力と授業技術に関する研究—最終報告書—』
- (8) 縫部義憲(1991)「日本語授業の「人間化」の工夫—外国語相互作用分析システムの利用」『日本語教育』75 pp. 12-23 日本語教育学会

- (9) 古川ちかし (1990) 「教員は自分自身をどう変えられるか—教員の自己改善に関する考察—」『日本語教育論集』7 pp.1-18 国立国語研究所日本語教育センター
- (10) 古川ちかし (1991) 「教室を知ることと変えること—教室の参加者それぞれが自分を知ることと変えること」『日本語教育』75 pp.24-35 日本語教育学会
- (11) 文野峯子 (1991) 「授業分析と教育の改善—客観的な授業分析の試み—」『日本語教育』75 pp.51-63 日本語教育学会
- (12) 細田和雅・岡崎敏雄・中條和光 (1988) 「日本語授業のFIAC方式とCOLT方式によるコミュニケーションの分析」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』pp.1-6 広島大学
- (13) 松本隆 (1990) 「相互作用分析再評価」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』13 pp.1-9
- (14) Allwright, D. and K. Bailey. (1991) *Focus on the Language Classroom : An Introduction to Classroom Research for Language Teachers.* Cambridge University Press
- (15) Chaudron, C. (1988) *Second Language Classrooms: Research on Teaching and Learning.* Cambridge University Press
- (16) Ellis, R. (1984) *Classroom Second Language Development.* Oxford
- (17) Ellis, R. (1990b) *Instructed Second Language Acquisition.* Oxford:Blackwell
- (18) Ellis, R. (1994) *The study of Second Language Acquisition.* Oxford:Oxford University Press
- (19) Long, M. (1980) "Inside the "black box": methodological issues in classroom research on language learning." *Language Learning* 30:1-42
- (20) Nunan, D. (1989) *Understanding Language classroom : a guide for teacher-initiated action.* Prentice Hall
- (21) Nunan, D. (1991) "Methods in second language classroom-oriented research: a critical review." *Studies in Second Language Acquisition.* 13:249-274
- (22) van Lier, L. A. W. (1988) *The Classroom and the Language Learner: ethnography and second-language classroom research.* London:Longman

(お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻)